Alchemy

あるけみー

奈良工業高等専門学校 現代視覚文化研究会 2020年春会誌

もくじ

novel

4 イントロダクション　もちまる

illust

11　緋色
12.13 もちまる
14　冬月
15　篝火
16.17　あしっど

column

19 kuroma

表紙　もちまる
扉絵　しゅう
編集　冬月

小説

イントロダクション

もちまる

こんにちは！　現代視覚文化研究会部員のもちまるです！
……といっても、つい最近入部したばかりなんですけどね。現視研への入部を考えているそこのキミ！　実質同級生だ、仲良くしよう。

まあ、そんなの自己紹介で話せよ、ってなりますよね。この冊子の最後の方に載ってるもんね、自己紹介。じゃあ何書こうかなあ。推しキャラの話なんかされても困るよなあ。いや、小説書けよ。小説って言ってんだから。

茶番はここで終わりにしよう。小説を書くということは、自分の脳内に浮かんだストーリーを文字にするということ、単純明快、至極簡単。今こんな風に有象無象を書き散らしているもちまるサンにも、考えればすぐに思いつく話なんですよ、小説くらい。うーん、何を書こう。

――俺の名前は毛蓋 茂武吉。高校二年生だ。運動も勉強も全部平均、モテるわけでもない。そんな目立たない俺は、今日も陽キャの陰に隠れて地味な学校生活を送る……はずだった。

いつも通りの通学路。道を歩く人々は、きっと俺と同じように地味な日々を過ごしているのだろう。これは偏見に過ぎないが、世の中の八割以上の人間は地味だ。お前らは俺のことをバカにするかもしれないが、お前らも多分俺と大した違いはない、平凡な人間なのだろう。

そんなことを考えながら、俺はある路地の横を通り過ぎようとした。なんてことはない路地だ、いつも横を通っている。しかし今日は違った。その路地の真横に来たその瞬間に、俺は路地の中から何者かに手を引かれた。

「うわあああ！」

ものすごい勢いだった。抵抗することも出来ず、俺は情けない声を出しながら路地に吸い込まれていった。引きずられて引きずられて、気付くと俺は不思議な暗闇の中にいた。無重力なのか、体がフワフワして俺は恐怖を感じた。暫くその空間を漂っていると、暗闇に光が差し込んできた。俺は一生懸命泳いで、光の方へ飛び込んでいった。

暗闇の先にあったのは、まさしく中世ヨーロッパのような世界だった。美しい緑が生い茂り、風車や小屋のようなものが点在していた。遠くにはそれらしい城もあった。訳も分からず俺がキョロキョロしていると、一人の美少女が俺の元へ駆けてきた。

「ああ、勇者さん！　お待ちしておりましたわ！」

「へ？」

何だって――俺が勇者？　意味が分からない。

「え、えと、どういうことなんでしょうか……」　間抜けな質問をする。こんな俺が勇者なわけないだろう。っていうか勇者ってなんだ。ここはゲームの世界か。

「そうですね！　説明しないと、何が何だかって感じですよね！私たちの世界は今、魔王に侵略されているのです。それで、私たちの世界を救えるのは異世界の住人だけだ、というお告げがあったのです。そして、あなたの世界で最も勇者に相応しい能力を持っていたのが、あなただったのですよ！」

クソ！　ありがちすぎるなあ。こんな小説、百万冊あるわ。こんなありふれた小説を読むために、新入生の君たちがこの冊子を開いてくれた訳がない。なんだよ異世界って。舐めてんのか。モブがすごい能力持ってる異世界とか、都合よすぎるだろ。
……でも、こんな感じの小説でも現視研ではウェルカムですから

ね！　本当に何でもいいんですよ。つい四か月前に入部した私が言うのも可笑しいですけど。まあ、寛容なセンパイ方は受け入れて下さるでしょう（適当）。

物語なんて思いつかねえよ、と思ったキミ。大丈夫です、イラストもあります。自分の好みの絵を描いて提出すれば、現視研ではそれだけで活動になります。私も、イラストを提出していますよ。ちなみに表紙も私です。うわ、私、頑張りすぎ！？

それにしても、どうしましょう。自分語りしても仕方ないですからね。小説を書きましょう小説を。でも、異世界系はちょっと飽きちゃったので、違う内容を考えないといけませんね。脳をフル回転させるのだ、もちまるよ。さすれば何か降りてくるはずだ。短編小説なんてアイデアが降りてくれれば三時間で書けますからね。その辺は人によるかもしれないですけど、半日あれば五千字くらいのものは書けます。五千字もあれば立派な小説ですから、現視研の活動は三カ月に半日とれれば計算上出来ます。まあそう上手くはいかないんですけど。あ、思いつきました、新しい小説。

――あの子が笑いかけた途端、桜の花びらがふわりと舞った。

この感覚は何なのだろう。あの子の笑顔が、僕の心に沁みついて離れなかった。あの子と話したあの日から、僕の頭の中はあの子で一杯だ。艶やかな長い髪、雪のように白い肌、透き通るような黒い瞳。あの子にもう一度会えたらどれだけいいだろう、と、僕は日々そのことばかり考えていた。

忘れもしない、僕があの子と出会った日のこと。春真っ只中で、桜の咲き乱れる日のことだった。あの日、僕は学校に遅刻しかけて、朝ごはんも食べずに家を飛び出した。

（急げ！　早くしないと、今日は大事な連絡があるって、先生が言ってたのに……）

あんまり急いでいたせいで、僕は信号が赤になっているのにも気付かず、大通りの横断歩道に入ってしまった。

「危ない！」

横断歩道の向こう側から声がして、僕は驚いて前に飛んだ。車が来ていたようだ。間一髪のところで、僕は事故に遭わずに済んだ。

その時声をかけてくれたのが、あの子だった。僕は、礼を言おうとあの子の顔を見た。あの子が声をかけてくれなければ、僕は車に撥ねられていただろう。

その時の衝撃は、今でも鮮明に思い出せる。あの子の凛とした、可憐ながらどこか大人っぽいうれいを帯びた顔が、僕の脳裏に強い衝撃を与えた。

「……ありがとう」

僕は、あの子の顔を直視できなかった。制服を着ていたが、僕の学校のものと違ったので、僕は少しがっかりした。

「大丈夫？　怪我とかしてない？」

あの子が、心配そうに僕の顔を見た。再び目が合ってしまって、僕は思わず後ずさりした。

「……だ、大丈夫だよ。ちょっとズボンが汚れただけ」

「……そっか。よかった」

そして、あの子が僕に笑いかけた。その笑顔は、あまりにも眩しかった。

……。

いやあ、ネタ切れしましたね。これもまあありがちではあるけど、さっきのよりかはいけると思ったんですけどねえ。なんせもちまるサンはまともな恋愛をしたことがないので、この辺はよく分かりませんでした。第一、ここからどうするんだよ。ハッピーエンドは流石に平凡だし、主人公をストーカー化させたり、女の子を殺したりすれば何とか書き上げられるかもしれないけど……それはちょっと重すぎますね。少なくとも、これから高専生活楽しもうって人

に見せる小説にはなりませんよね。というかハッピーエンドが平凡ってなんだ。つべこべ言わずにさっさと書け。

そういえば私、兼部してないんですよね。センパイ方の話では、現視研はむしろ兼部に最適な部活らしいんですけど。じゃあなんで兼部していないのかと言うと、実は軽音楽部にも入っているからなんですよね。兼部してんじゃん、ってなるかもしれないですけど、今や幽霊なのでノーカンです。退部する勇気が無いだけです。私、邦楽とかボカロとか結構好きなんです。だから軽音に入部したんですけど、ねえ……ま、向いてませんでしたね。あそこは私みたいな根暗が入る部活じゃなかったです。そもそもバンドが組めませんでした。誰かに声かけられないかなーとか思ってましたけど、無理でした。ドラムをやろうとしていたんですけど、これもからきしでした。そうして七か月ほど幽霊のままで、このままではいけないと、現視研に入部したのです。やる気無っ。

今までありがちな小説を二つ考えてきましたけど、どちらも続きませんでしたね。やっぱり私、小説書くの向いてないのかなあ。諦めてイラスト描くか。でもなあ、絵はまだ下手っぴだしな……じゃあなんで表紙描いてんだって話ですが。自分が手を挙げたことなんだから、責任を持ってほしいですよね（他人事）。

頑張って尺を稼いできましたが、もちまる、未だアイデアを思いつけずにいます。もちまるサンは今までにいくつか小説を書いているんですけど、百パーセント人が死んでるんですよね。人殺さないと深い小説が出来ないとか思ってる人種です。それ、深いっていうか重いだけなんですけどね。何か斬新な物語とか書けたらいいとは思っていますよ、まあ。こういうのは身の回りからアイデアを探すのが良いんです。それが一番手っ取り早い。センセーショナルで面白い物語も、案外そういうちょっとしたことから生まれているはずですから。

――こんにちは。ぼくはゴミ箱。ごく普通のマンションの、ごく普通の家庭の隅に置かれているよ。今日はどんなゴミが入れられるのかな。

朝いちばんに起きるのは、決まってお母さんなんだ。お母さんがいつも、子どもたちやお父さんのお弁当を作ってる。今はスギ花粉がいっぱい飛んでるから、お母さんは鼻の調子が悪くてティッシュを沢山捨ててくれるよ。ぼくは一日中同じところにいて暇だから、ゴミを捨ててくれる方が嬉しいんだ。

難しいなあ。でも題材としては悪くないよね？　いや、悪いか。分からん。

とりあえず、書き方を変えてもう一回やってみるか。

――ごく普通のマンションの、ごく普通の家庭の隅。そのゴミ箱は、そこにあった。バケツ形の、どこにでもあるようなものだ。ゴミ箱が置かれたのは、今から五年前のこと。それ以降、そのゴミ箱が動いたことは殆どなかった。週に一度、ゴミ袋を付け替える時以外は。

この家庭で朝いちばんに起きるのは、この家のお母さんだ。彼女は子どもたちやお父さんに、毎日弁当を作っている。しかし、この時期はスギ花粉が酷く、朝からお母さんの鼻の調子は非常に悪かった。ティッシュを一枚とり、大きな音を立てて鼻をかむ。そして、隅のゴミ箱に捨てる。そのゴミ箱にとって、ゴミを捨てられるのはむしろ喜ばしいことだった。ゴミ箱は、一日中定位置にいなければならないことを退屈に感じていた。

いや、無理だな。なしよりのなしだ。なんでゴミ箱が主役なんだ

よ。斬新すぎだろ。そこまでひねくれたやつなんか、誰も求めてないって。そもそもここからどう物語を展開するんだよ。一日中なんかゴミを捨てられるって話しか出来ないだろうが。

あーあ。こりゃあ困ったなあ。現視研にも〆切ってもんがありましてね。その期限までに提出しないと会誌に載せてもらえないんですよ。こうやって悩んでいる間にも、時間は過ぎていきます。クソ……まだ表紙描けてないのに……。でも、〆切があるからこそ、〆切までに頑張って書き切ろうっていう気になれるんです。〆切がなければ、小説もイラストも永遠に完成しない。そんな人もいるかもしれませんし。

待って、もうちょっと尺を稼げば何か思い浮かぶかもしれない。退屈かもしれないけれど、もうちょい待ってて。ああ、でも何の話をすればいいのか分からんな。こっちの方もネタ切れかもしれん。色々ごめんね、後輩に待たせちゃって。

もう、現視研に入った経緯でも話しますか。自分語りだろうが尺稼ぎだろうが、もう知ったこっちゃねえ！　自己満足でいい、誰が見るんだってツッコまれてももう知らん！　この世には私小説っていう、身の上話を書き連ねるタイプの小説だってあるんだ！　というわけで。

現視研に入る前に、高専祭で現視研の展示を見たんですよ。あ、高専祭っていうのは、高専における文化祭のことです。知ってるかもしれませんけど一応。で、やってることとかが楽しそうだな、と思ったのが最大のきっかけです。元々興味があって展示を見にいったので、一概にそれが理由とも言い切れませんが。ですけどやっぱり一番嬉しかったのは、もちころりんっていう小さいマスコットがあるんですけど、自分の持ってたもちと展示してあったもちで記念撮影出来たことですかね。

現視研の展示室に入った瞬間、もちころりんを見つけてめっちゃ嬉しかったんですよ。可愛いですから。もちもちですから。それで写真撮ってもいいかって訊いたら、ネットにあげないならいいって言ってくださったんです。十体くらい展示してあって、そのもちたちと自分のもちを積んで写真を撮らせて頂きました。因みにその時に会ったセンパイと一か月後に再会したのですが、まるで初めて会ったかのように挨拶されました。悲しい。

よし、何とか思いついたぞ。皆さん大変お待たせしました。もちまるによる新しい小説です、どうぞ！

――私、リリーっていうの。今日で八歳になったのよ。今日はパパもママも私にとっても優しくしてくれる日。ケーキもたくさん食べれるし、新しいお人形さんも貰えるの！　いいでしょ？

でも、お兄ちゃんったらふてくされちゃって、私のことお祝いしてくれないの。もう、私はお兄ちゃんのお誕生日にはお祝いしてあげるのに！　年上の癖に、いやんなっちゃうわ。だからあのムスッとした顔に、パイを投げつけてやることにしたの。今日は私のお誕生日だもの、少しくらいイタズラしてもママに怒られたりしないわよね。それにしても、どうしてお兄ちゃんは私のことをお祝いしてくれないのかしら。それどころか、なんだか私を避けてるみたい。いつもはこんなんじゃないのに……。

私は、ママに見つからないようにキッチンからパイを取ったわ。ママが今日のためにたくさん作ったの。私はパイが大好きだからね！　一つくらい取っても、大丈夫よね。それから、私はそーっとお兄ちゃんの近くにある棚のうしろに隠れたわ。お兄ちゃんが顔にパイをかぶってるところを想像して、ちょっと笑いそうになっちゃったけど、なんとか我慢した。後はお兄ちゃんが私の方に来てくれれば……。

「リリー、どこにいるの？」

ママだわ！　どうしてこんな時に限って、私のことを呼ぶのかしら。ママがあんまり私を呼ぶから、お兄ちゃんもキョロキョロしだしちゃった。これじゃ見つかっちゃうわ。イタズラしようとしてい

たのもバレちゃう。ママ、怒らないかな……今日は私の誕生日なんだから、怒らないでくれるよね……。
お兄ちゃんと目が合っちゃった！　どうしよう、私、お兄ちゃんには怒られるかもしれない。お兄ちゃんも怒ると怖いの。嫌だなあ……。
「リリー……どこだ？」
あれ、お兄ちゃん、気付いてないの？
お兄ちゃんは、私のすぐ隣を通り過ぎて行っちゃった。見えないところじゃなかったはず。それに、さっき目も合ったわ。どうして、どうして見つけてくれないの？　そんな風に無視されたら、私、不安になっちゃう……。

……ごめん。飽きた。
いやいや、あんなに「どうぞ！」とか言っておきながら、何飽きてんだよって思うかもしれませんけど、本当に。いけるかなーって思ってたんだけどなあ。もう思いつかなくなっちゃったなあ。で、普通に飽きた。それだけです。みんなも、なんか創作する時は飽きたら諦める方が良いよ。つまらんもの作っちゃうよりはね。
というか、もうそろそろいいかな。これくらいの長さなら、小説として認められるのではなかろうか。現視研に入部したいと思っているキミは、小説を書くなら基本どんな内容でもいいけど、もちまるって人の真似だけはしない方がいいよ。あの人の小説はヤケクソだから。というかこの小説、誰かに怒られるかもしれんわ。だけど、ヤケクソで済ますわけにもいかないよな。もう一回くらい、小説を書く努力をした方がいいよな。頑張ります。

――時は明治。明治維新の真っ只中、とある金持ちの家で、その男の子は産まれた。男の子の産まれた家は、金持ちなだけではなく、時代の最先端を行っていた。洋服を真っ先に取り入れ、我が子らに着せていた。食器もスプーンとフォークを使っていた。そして、教育にも熱心だった。末っ子である男の子にも教師をつけ、毎日勉強をさせた。少年は幸せだった。親も兄たちも先生も、皆が少年に優しかった。家柄が良すぎるせいで友達は少なかったが、少年は真っすぐに成長した。少年は聡明で、とても純粋だった。
そんな少年が八歳になったある夜、少年は不思議な夢をみた。夢にしてはやけに意識がハッキリとしていて、夢であることも認識できた。その夢の中には、少年の家にあるような家具が沢山あった。しかし、その大きさはまるで違って見えた。机は少年の家ほど大きく、戸棚はくずかごよりも小さかった。少年はそれを酷く不気味に思った。怖くなって目を覚まそうとするが、頬を抓っても頭をぶっても、どうしても覚めない。
「誰か、助けて！」
少年は助けを呼んだ。少年が独りぼっちになったのはこの時が初めてだった。彼はどうすればいいのか、見当もついていない様子だった。次第に涙が零れてきて、少年は声をあげて泣いた。
「お母さん、お父さん……どうしよう……」
少年は一人蹲って泣いていた。すると、どこからか一人の女の子が現れた。少年よりも、少し年上くらいと見えた。その子が少年の肩を叩くと、少年が驚いた顔でその子の方を見た。目を見開いた、少しとぼけたような顔だ。それを見た女の子はくすくすと笑って話し始めた。
「面白いわ。あなたって、驚いた時いつも同じ顔をするんだもの。普通、前とちょっとは違いそうなものでしょう」
少年の目には、その少女の笑顔が輝いて見えた。この子ともっと話がしたい。さっきまでの恐怖などすっかり忘れて、少年はそう考えた。

「だれ？」
少年は、頓狂な声を出した。少年は頭が混乱しているせいで、まともな質問が出来なかった。それでも少女は、笑いながら返事をする。
「私は、あなたの夢に住んでるの。あなたとも何度かお話したことがあるのよ、覚えてない？」
少年は口を半開きにしたまま、首を横に振った。
「そうでしょうね……あなたはいつも、私のことを忘れて目を覚ますわ。それが私、悲しくて仕方ないの。だって、そうでしょう？あなたは私の、唯一の友達なんだから」
少年は少女の言っている意味が分からないでいた。僕が、この人の友達なの？　全然覚えてないのに？　それに、夢に住んでる、ってどういうことなんだろう。少年の頭には多くの疑問が浮かんでいた。
少年はやっと頭に整理をつけて、一つの質問をしようとした。だが、その瞬間に、少年は自分のベッドの上に戻っていた。目が覚めてしまったのだ。

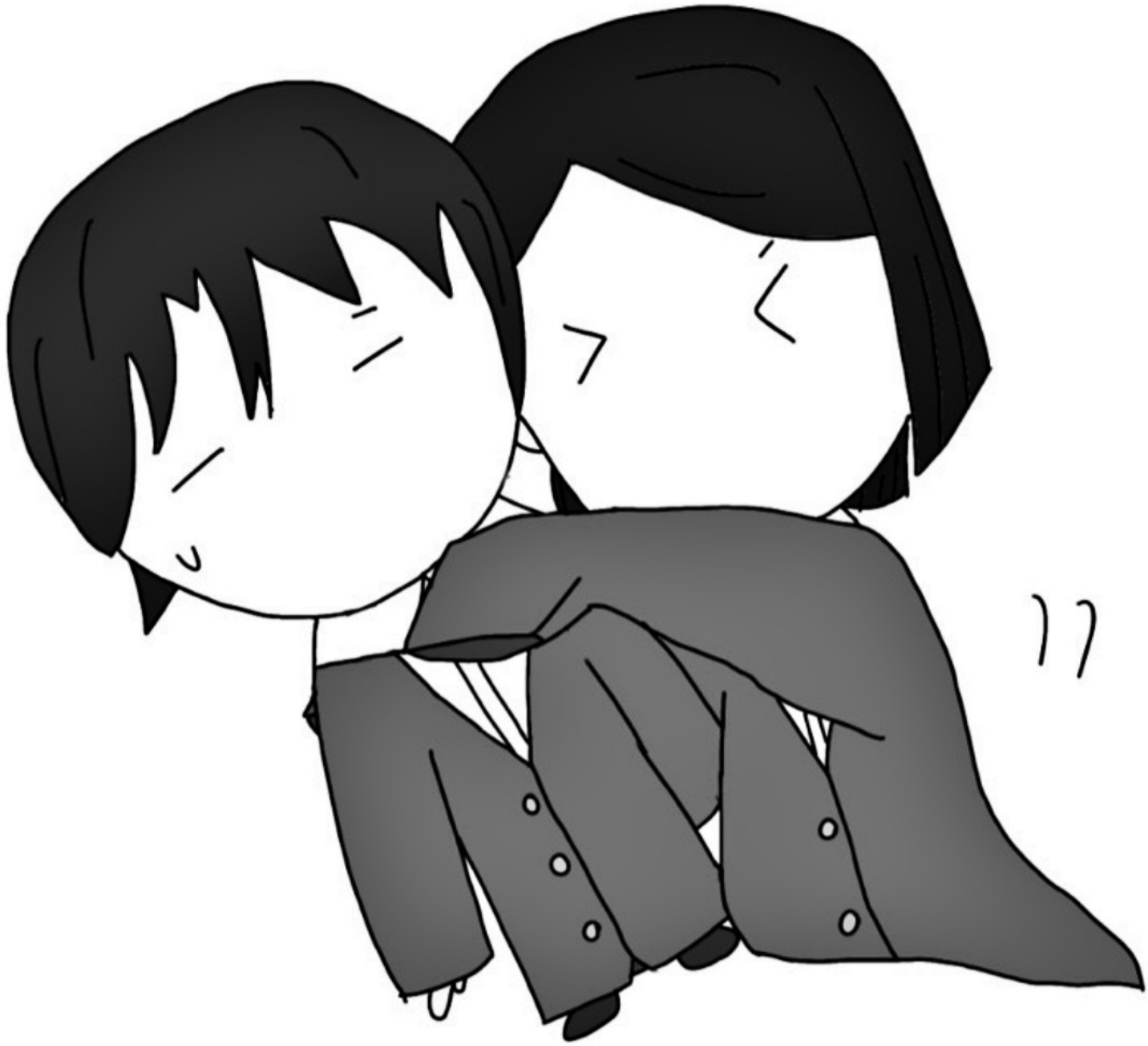
おお！　なんかこれが私の書きたかった小説な気がします。どうやってオチをつけるのかは特に決めていませんけど、この物語なら最後まで書こうと思えます！　でも、もう長さが丁度良くなっちゃったので、今回は書かないでおきます。新入生のみんな、今日は私の戯言に付き合ってくれてありがとう。
おかげで、夏の会誌には良い小説が書けそうだ。夏の会誌はネットでの公開になるから、『奈良高専　現視研』で是非調べてくれたまえ。ま、こんな雑談を書き溜めて小説だと言い張るやつの作品なんか、ちゃんとしてても見ないわ！　と思う人は見なくてもいいです。現視研って色々出来て楽しい部活だから、一ミリでも興味ある人は是非部室に来てみて下さい！　そしたら、また話をしましょう！　次こそは推しキャラの話をします！

了

イラスト

緋色

byもちまる



もちまる

新入生の皆さん

ご入学おめでとうございます！

冬月

篝火
キミノ
チューニ
ゴコロニ
ブッササレ!

あしっど

あしっど

コラム

フリ〜〜〜なフォントのすゝめ

kuroma

どうも、こんにちは。現代視覚文化研究会音楽班の人です。

そして、新一年生の皆様、ご入学おめでとうございます。今年度もコラム作りのやる気が湧いたので独自の主観でフォントの話を書こうと思います。つよいフォントオタクには敵わないので参考程度で…

ではまず、私の自己紹介が載っているページのフォント紹介からいきたいと思います。（※フォントの入れ方は紹介しません。）

バナナスリップ

例文「色はみな　空しきものをたつた川　もみぢ流るるあきもひとときし」

一言：インパクトさで印象を付けたい時に使いたいフォント。

ひらがな・カタカナ・英数字・記号・漢字（1011文字）合計1763文字収録されている。

数式フォント

例文「色はみな　空しきものをたつた川　もみぢ流るるあきもひとときし」

一言：幾何学模様が文字に取り入れられている個性的なフォント。

使い所は少ないと思うがかっこいい。

廻想体

例文「色はみな　空しきものをたつた川　もみぢ流るるあきもひとときし」

一言：推しフォント。だって、かっこいいもん。他にも廻想体を可愛くしたロンドBというフォントもあってそちらもおすすめ。

UDデジタル教科書体

一言：見やすさ・読みやすさが最高。このコラムの文章のデフォルトフォントです。良いぞ。

◆ ✌ ■ ♋♎✌ ■ ♋◆

一言:Wingdingsは今の絵文字の元で歴史が長いフォント。ゲームでの使用例としてUndertaleで使用されています。

次に、**イチ押し**のフォントをご紹介。

源ノ角ゴシック

例文「色はみな　空しきものをたつた川　もみぢ流るるあき
もひととき」

一言:MSゴシックより游ゴシック。游ゴシックより源ノ角ゴシック。

フォントポにほんご

例文「色はみな　空しきものをたつた川　もみぢ流るるあき
もひととき」

一言:角ゴシックだけども丸みを帯びている部分が可愛いくて良い。

はんなり明朝

例文「色はみな　空しきものをたつた川　もみぢ流るるあき
もひととき」

一言:明朝体でもやわらかくふんわりとした印象を与えたい時に使えそうなフォント。

機械彫刻用標準書体

例「立入禁止」「非常停止」「安全確認」「ご安全に」

一言:使い所は限られるけど公共物っぽさを出したい時にはおすすめ。

あんずもじ

例文「色はみな　空しきものをたつた川　もみぢ流るるあき
もひととき」

一言:定番の手書き風フォント。割と使いやすい(らしい)。

最後に、Windowsに標準搭載されているフォントについて。

MS 明朝

例文「色はみな　空しきものをたつた川　もみぢ流るるあき
もひととき」

一言:私自身あまり好きじゃないフォント。但し、標準搭載=誰でも使えるという観点においては優秀。実験レポートをWordで作る時にも指定されがちなので結構お世話になる。因みに、プレゼン資料作成の観点では使用は推奨されていません。游明朝の方がマシ。

MS ゴシック

例文「**色はみな　空しきものをたつた川　もみぢ流るるあき
もひととき**」

一言:プレゼン資料作成で(私は)使いたくない角ゴシック体。これを使うより標準搭載されている游ゴシックやメイリオを使いましょう。

創英角ポップ体

例文「**色はみな　空しきものをたつた川　もみぢ流るるあき
もひととき**」

一言:ダサい!って言われがちだけど使い方次第で化ける。フォント名通り、お店のPOPとか強調したい部分とか色んなモノに使いやすいし使われやすい。

Times New Roman

例文「This is a pen and this is a pineapple…」

一言:こちらも実験レポートなどで指定されがちなフォント。

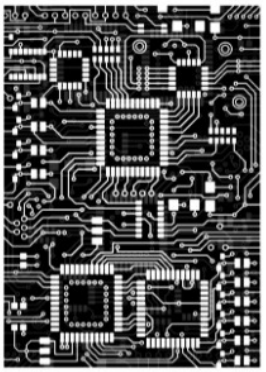
以上で紹介は終わりです。他にも、「FONT FREE」のようなサイトにてフリーなフォントが紹介されていますので用法・用量を守って(利用規約を守って)楽しくフォントを使ってみてはいかがでしょうか?

自己紹介

あしっど

ケモ耳はいいぞ

2年物質科学工学科の緋色です。
イラスト班してます。
基本部室にいないですがよろしくお願いします。仕事してないです。とゆうかお仕事が無い。
ゲームとプログラム(C言語)の話が好物です。



HN：キツタヌ

原稿を落としました猛省します

- 文章班
- 物質科学工学科
- ゲームは好きだけど苦手
- 焼肉屋さん太郎が好き
- タラタラしてんじゃね〜よも好き
- 冷やしたタフグミも好き
- 本名は禿げリーゼント

もちまる

- 2Iのひと
- 絵も小説もかく
- 以上

TEXTER

小説班に所属。
しかし最近公開した作品はゲーム。
そんな感じの活動をしています。

[今までに公開したゲーム]

Lights Out Machines
古典ゲーム「ライツアウト」に
アレンジを加えたパズル。

All Tiles White Out
画面上のタイルをすべて白にする、
独創的な法則を持つパズル。

他にもアナログゲームを製作していたりします！

はんどるねーむ	kuroma
なにしてんの？	作曲 Y Voxel
こめんと [[] /V¥ /V¥ [- ^/ 7	最近は WingdingsやLeet表記のような意味不明なようで意味がある表記にハマっています 推しフォントは廻想体です

冬月（ふゆつき）

・てきとーなひと。
・気が向けば音楽とイラストを生産する。
・ずっと眠ってたい…
・生産率ぜろぱーせんと
・気力が欲しい
・来世は優しい世界に転生したい！

(´・ω・`)

↑似顔絵

HN：あっこどん

どクズ

ですがよろしくお願いします

shobonnusan

（しょぼんぬさん）

＜STATUS＞

- 2-I のはず
- イラスト班？
- 部室にほとんどいないと思う
- ボイロ好き(主:きりたん)
- pc,switch,スマホのゲームやってる(浅く)

ex)ポケモン、スマブラ、aqex、
マイクラ、DBD、ウニ等

たけちゃん

- 小説班班長のくせに小説出したことがない
- ゲームをするのが好き
（スプラ・マイクラなど）
- 常に何かをしている（ふりをする）

衰えを知らない中二病！！

- ハンドルネーム・・・篝火
- 名目上の会長！！
- 小説班とたかをくくり、提出したのはイラストのみ！
- 〆切はギリギリまで知らぬ存ぜぬなタイプry(殴
- ・・・調子に乗ると怖いよ。フッ見えざる力は我が特権だったのだが・・・だが我は分かっているぞ。汝もまた、この冊子の瘴気に当てられ、創作したくて腕が疼いているであろう。さぁ、共に覇道（黒歴史）を歩もうぞ！！

あとがき

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます！
編集の冬月と申します。今回の現代視覚文化研究会の春会誌「Alchemy」を読んでいただきありがとうございます！
楽しんで頂けましたでしょうか？
いやぁ、チョココロナウイルスのせいで7月まで登校禁止だし楽しみにしている学校生活も送れないって辛いですね…専門の実験とか楽しみにしてる人多そう（偏見）だからほんと大変だなぁ…オンライン授業とかにしたら絶対Twitterばかりしてるやつしかいないと思いますね。現に私がそうなので（おい）
こんな私の話は置いといて、まず「現代視覚文化研究会ってなんぞや？」って思ってる方いなさそう。というか「この説明何度も聞きすぎて飽きたわボケ！」って怒られそうですので辞めます…（実は文章めちゃくちゃ長文で説明していたのだが、会長さんが説明してくださったので仕方がなく割愛）
さてと、こんな感じで現視研の説明はいいかな…じゃあ私の自己紹介でもしますか。え？前に自己紹介ページあるから充分だろって？いやいや、あんな数文で私のこと分かるんか～って感じでしょ。それでわかるあなたはエスパーだよ！
改めて、冬月と申します。音楽班に所属してますがイラストも出してます。春会誌は可愛い女の子のイラスト描きました！音楽はオルゴールミュージックを基本的に作ってます。よわよわですが承認欲求の為に某赤い動画サイトに投稿してますね。全然再生回数ないけどね～って言ってて虚しくなってきたのでこのことは忘れて下さいね…
創作とか編集とか意欲わかないとする気起きないのよなぁ…はぁ…つら…
よし、最後だしやる気出せ自分！
締めの部分だぞ、大事なところだ！よし！

では、ここまで読んで下さりありがとうございました！
登校許可が降りたら現視研部室にいらしてくださいね！来てくれた新入生は、部室にいる上級生がカードゲームをもてなしてくれますよ！私は多分部室にいませんけどね～
それでは、失礼させていただきます！

冬月